長岡京跡発掘調査概報

昭和57年度

京 都 市 文 化 観 光 局

財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

序

京都市域には、平安京跡をはじめ、過去数千年に至る間の各時代の遺跡が各所に存在し、周知の埋蔵文化財包蔵地の総面積は、およそ5,000ヘクタールにも及んでいます。

古都といわれてきた京都も現代都市へと変容しつつあり、市内のいたるところで、かつての木造家屋群は、ビルへと変わり続けています。また、土木工事等による発掘件数が年とともに増加の傾向を示しているということは、一方では新たな事実の解明が進むことではありますが、また一方では、それに伴って遺跡が消滅するということにもなります。

このような状況の中で、本市といたしましても、市民や工事関係者の方々などの格別の御協力をいただきながら、保存し得る遺跡は可能な限り保存し、直接保存し難い遺跡については、その状態をできる限り後世に伝えられるように努めてまいりました。

この発掘調査概報は、昭和57年度国庫補助事業として実施した発掘調査の結果をまとめたもので、これが今後ながく活用されるよう念願しています。

おわりに、調査に当たって御協力、御援助をいただいた文化庁をはじめとする関係各位、市民のみなさま方に心から感謝の意を表します。

昭和58年３月

京都市文化観光局

凡　　例

1　本書は、京都市文化観光局が財団法人京都市埋蔵文化財研究所へ委託して実施した文化庁国庫補助を伴なう昭和57年度の長岡京跡の発掘調査概要報告である。

2　調査個所は下記の通りである。

長岡京左京四条三坊・四坊／京都市伏見区菱川町49番地

3　本書の執筆は平田泰がおこなった。

4　報告書作製にあたって、下記の諸氏の参加を得た。端大志、真喜志悦子、吉本健吾。

5　本書で使用した遺構の番号は、本書に限って一連のものであり、遺構番号の前にはＳＡ：築地・柵、ＳＢ：建物、ＳＤ：溝、ＳＫ：土坑、ＳＰ：柱穴の分類記号を表示した。

6　図中に使用した方位と座標は、国土地理院の平面直角座標系Ⅵにより、標高は京都市水準点（T.P.）によった。

7　本書に使用した地図は、京都市発行の10,000分の１地形図を調整したものである。

目　　次

第１章　調査経過……1
　1　調査に至る経緯……1
　2　調査の概要……5
第２章　遺　　跡……6
　1　遺跡の層序……6
　2　遺構の概要……6
　3　古墳時代の遺構……7
　4　長岡京期の遺構……8
第３章　遺　　物……10
　1　遺物の概要……10
　2　古墳時代以前の遺物……10
　3　長岡京期の遺物……12
第４章　まとめ……16

挿図目次

図１　調査地付近航空写真……1
図２　調査位置図……2
図３　調査地周辺図……4
図４　調査風景……5
図５　ＳＤ40実測図……7
図６　ＳＫ28実測図……8
図７　ＳＤ63出土高杯……10
図８　ＳＤ64出土遺物……11
図９　ＳＤ63出土石匕（Ｓ＝1／2）……12
図10　長岡京期の出土遺物……13
図11　ＳＤ36出土銭貨（Ｓ＝1／1）……14

表 目 次

表１　研究所既調査一覧表(長岡京跡に限る)……3
表２　出土遺物の総量と百分比……15
表３　出土土器遺構別一覧表……17

図 版 目 次

写真図版１　１．調査前全景(東から)　２．調査前全景(西南から)
写真図版２　１．１区長岡京期全景(南から)　２．ＳＸ64(南から)
写真図版３　２区長岡京期全景(東から)
写真図版４　１．ＳＤ27・ＳＡ25・ＳＢ33(南から)　２．ＳＤ63(南から)
写真図版５　１．ＳＤ40内杭検出状況(南から)　２．ＳＤ67・ＳＤ67Ｂ(北から)
写真図版６　１．ＳＤ27堆積状況(北から)　２．ＳＤ63堆積状況(北から)
写真図版７　１．ＳＤ36堆積状況(北から)　２．ＳＤ36銭貨出土状況(西から)
　　３．ＳＤ64遺物出土状況(東から)
写真図版８　古墳時代出土遺物
写真図版９　１．古墳時代出土遺物　２．長岡京期出土遺物
写真図版10　長岡京期及び縄文時代出土遺物
図版１　長岡京期１区実測図
図版２　１．長岡京期２区実測図　２．古墳時代２区実測図
図版３　調査区土層堆積図

第１章　調査経過

１　調査に至る経緯

調査地は、東南に伸びた向日町丘陵の南端で、東海道新幹線と名神高速道路の交叉する東側にあたり、菱川町集落の東端に接する水田の一画にある。敷地面積は約1,700㎡の広さを有している。この敷地に約１ｍの盛土を行ない、十数棟の木造住宅を建設する計画の申請があった。木造住宅では、基礎工事が比較的浅い掘削にとどまるため、遺跡の破壊される恐れは少ない。しかし、調査地南端に上記住宅に伴なう幅６ｍの道路が併設され、側溝部分の掘削工事が行なわれること、将来の各戸の浄化槽設置工事による掘削などで、遺跡の破壊も皆無ではないことが懸念されるに至った。

一方、調査地周辺における埋蔵文化財の調査は、京都市域に限っても30次(注１)に及び、重要な成果を挙げるに至っている。特に、本調査地の東隣にある神川小・中学校敷地内の調査（調査位置１）、南側の外還状線街路新設に伴う調査(調査位置12)、日本専売公社工場地内

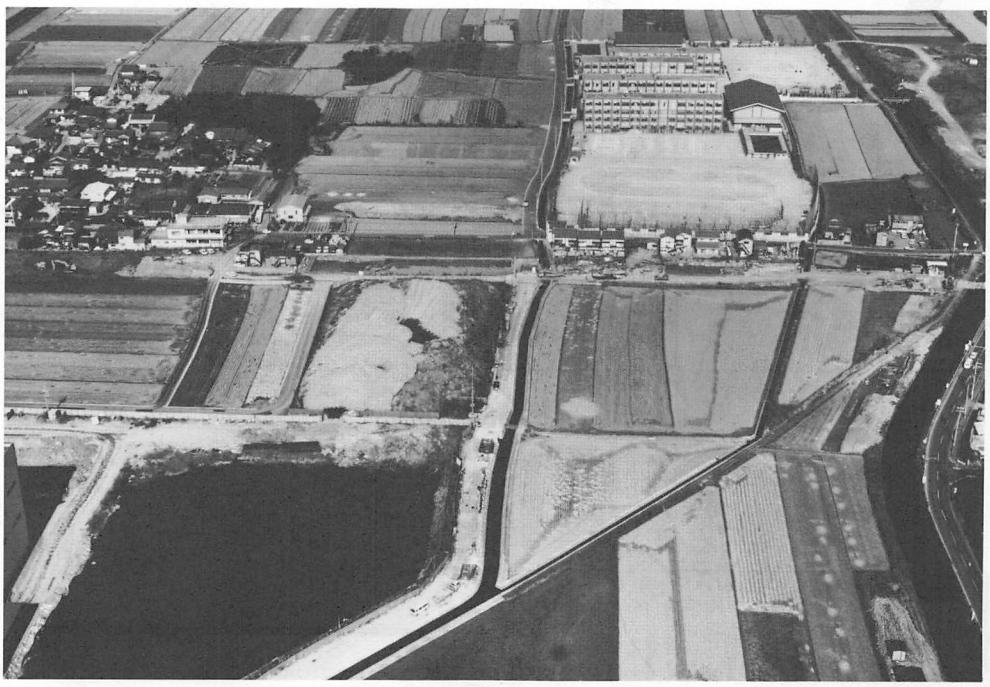


図１　調査地付近航空写真

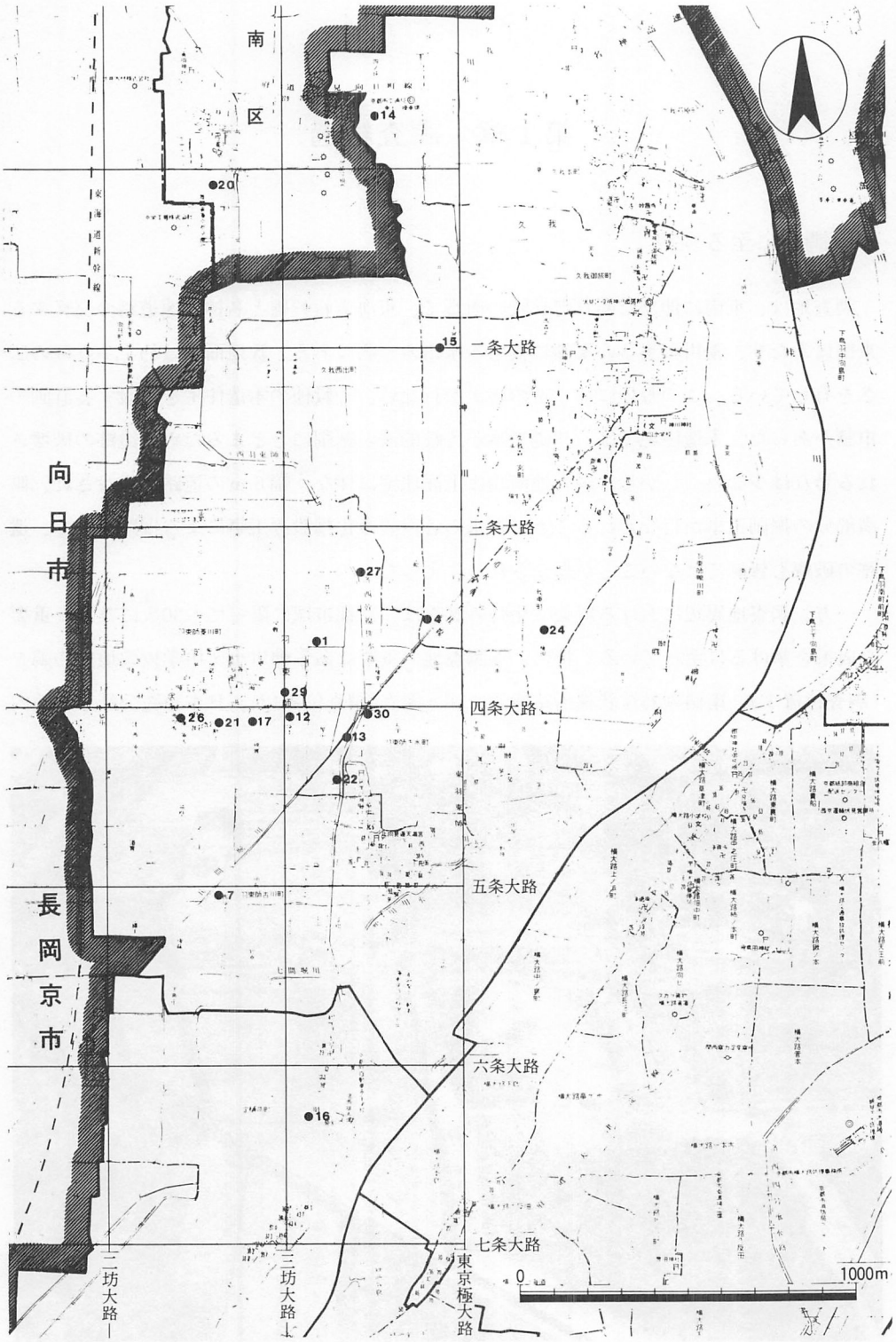

南区
向日市
長岡京市
二条大路
三条大路
四条大路
五条大路
六条大路
七条大路
二坊大路
三坊大路
東京極大路
0
1000m

図２　調査位置図

表1　研究所既調査一覧表（長岡京跡に限る）　（昭和58年３月現在）

調査位置	契約番号	調査方法	調査年月日（昭和）	調査地点（京都市）	調査面積	推定地	調査成果	文献（昭和）
1	.51−17	発掘	51.12.4～52.4.23	伏・羽束師菱川町 羽束師小・神川中学校	7200㎡	四条四坊	長岡京期三条大路側溝、 六角小路側溝、建物、柵	52年度「長岡京跡発掘調査報告」 「京都市埋蔵文化財研究所調査報告II」
2	51−37	立会	52.1.10～52.9.30	伏・羽束師菱川町、久我森の宮町		四条三坊		
3	53−33	〃	〃	〃				
4	53−93	発掘	54.4.9～54.4.18	伏・久我町森の宮町15−26	380㎡	四条四坊		
5	54−38	立会	54.9.1～54.11.1	伏・羽束師菱川町439−69		五条三坊		
6	54−60	〃	55.1.8～55.1.31	〃				
7	54−45	発掘	54.10.8～54.12.8	伏・羽束師古川町390、391 上下水道	1000㎡	六条三坊	長岡京期井戸、弥生時代河川	
8	54−64	立会	55.1.16～55.2.29	南・久世東土川町～上久世地内				
9	54−69	発掘・立会	55.2.11～55.2.15	伏・淀樋爪町、水垂町、大下津町南	36㎡	五条三坊他	弥生時代土坑	54・55年度「京都府桂川右岸流域下水道管布設工事に伴う発掘調査概要」
10	55−1	発掘	55.4.1～55.8.30	南・久世東土川町～久世上久世町	150㎡	二条三坊他	長岡京期溝、弥生時代河川	同上
11	55−2	発掘	〃	〃		〃		同上
12	55−39	立会	55.8.4～56.2.3	伏・羽束師菱川町他１ヶ町東部分	1825㎡	五条三・四坊	長岡京期建物、東三坊大路東側溝、井戸、土坑　弥生～古墳時代溝、土坑	55年度 長岡京跡計画道路１等大路第３類第46号外環状線整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」
13	55−71	〃	55.9.12～55.11.11	伏・羽束師菱川町他河川敷	553㎡	五条四坊	長岡京期柱穴、弥生時代竪穴住居	55年度「長岡京跡都市小河川改修事業西羽束師川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」
14	55−78	〃	55.11.5～55.12.23	伏・久我本町11−25他14	500㎡	二条四坊	古墳時代杭、河川	
15	55−81	試掘	55.11.10～55.12.26	伏・久我森の宮町13−９他	645㎡	二条三条四坊	長岡京期二条大路南北側溝、井戸、土坑 古墳時代溝	
16	55−82	〃	55.11.14～55.11.16	伏・淀樋爪町159−１係	7896㎡	七条三坊		
17	55−87	発掘	55.11.11～56.1.29	伏・羽束師菱川町他一ヶ町	520㎡	五条三坊	長岡京期建物、柵、井戸、溝 古墳時代水田	55年度「長岡京跡桂川右岸流域関連羽束師３号幹線公共下水道に伴う長岡京左京四条三坊跡発掘調査報告書」
18	55−88	立会	55.12.18～55.12.14	伏・淀納所町	28㎡	八条四坊		
19	55−92	発掘・立会	56.1.14～56.5.31	伏・羽束師菱川町、古川町、久我森の宮町	170㎡	四条四坊他	長岡京期柱穴、古墳時代河川	
20	55−13−2	発掘	55.12.23～56.1.19	南・久世東土川町191−1、192−1	76㎡	二条三坊	時期不明近衛大路側溝	55年度「長岡京跡発掘調査概要」
21	56−29	〃	56.7.11～56.12.28	伏・羽束師古川町、菱川町	2382㎡	五条三坊	長岡京期建物、溝、柵、井戸、土坑、古墳時代水田、足跡、竪穴住居、溝	
22	56−69	発掘・立会	56.10.26～56.12.17	伏・羽束師菱川町他	500㎡	五条四坊	古墳時代河川	
23	57−2	立会						
24	57−3	発掘	57.4.15～57.9.30	伏・久我東町４−10外	4474㎡			
25	57−37	立会	57.7.10～					調査中
26	27−16	発掘	57.9.　～	伏・羽束師菱川町		五条三坊		調査中
27	57−21	〃	57.9.20～58.1.5	伏・羽束師菱川町、西羽束師河川敷	1007.6㎡	三条四坊 四条四坊	長岡京期三条大路、二条南第三小路	
28	57−42	立会	57.8.26～					調査中
29	**57-5-1-1**	**発掘**	**58.1.20～58.2.23**	**伏・羽束師菱川町49**	**450㎡**	**四条三・四坊**		**本調査**
30		〃	58.3.7～58.3.25	伏・羽束師志水町	30㎡	五条四坊		

（注２）
の調査などでは、それぞれ古墳時代の溝、竪穴住居、水田、土坑、長岡京期の道路側溝、建物、井戸、土坑が検出され、これに伴う遺物も大量に出土している。

このことは、本調査地も同様な条件下にあり、遺構・遺物の検出される蓋然性が極めて高く、調査の必要な地点であることが認められた。

この結果、京都市埋蔵文化財調査センターは、原因者との協議を経て、財団法人京都市

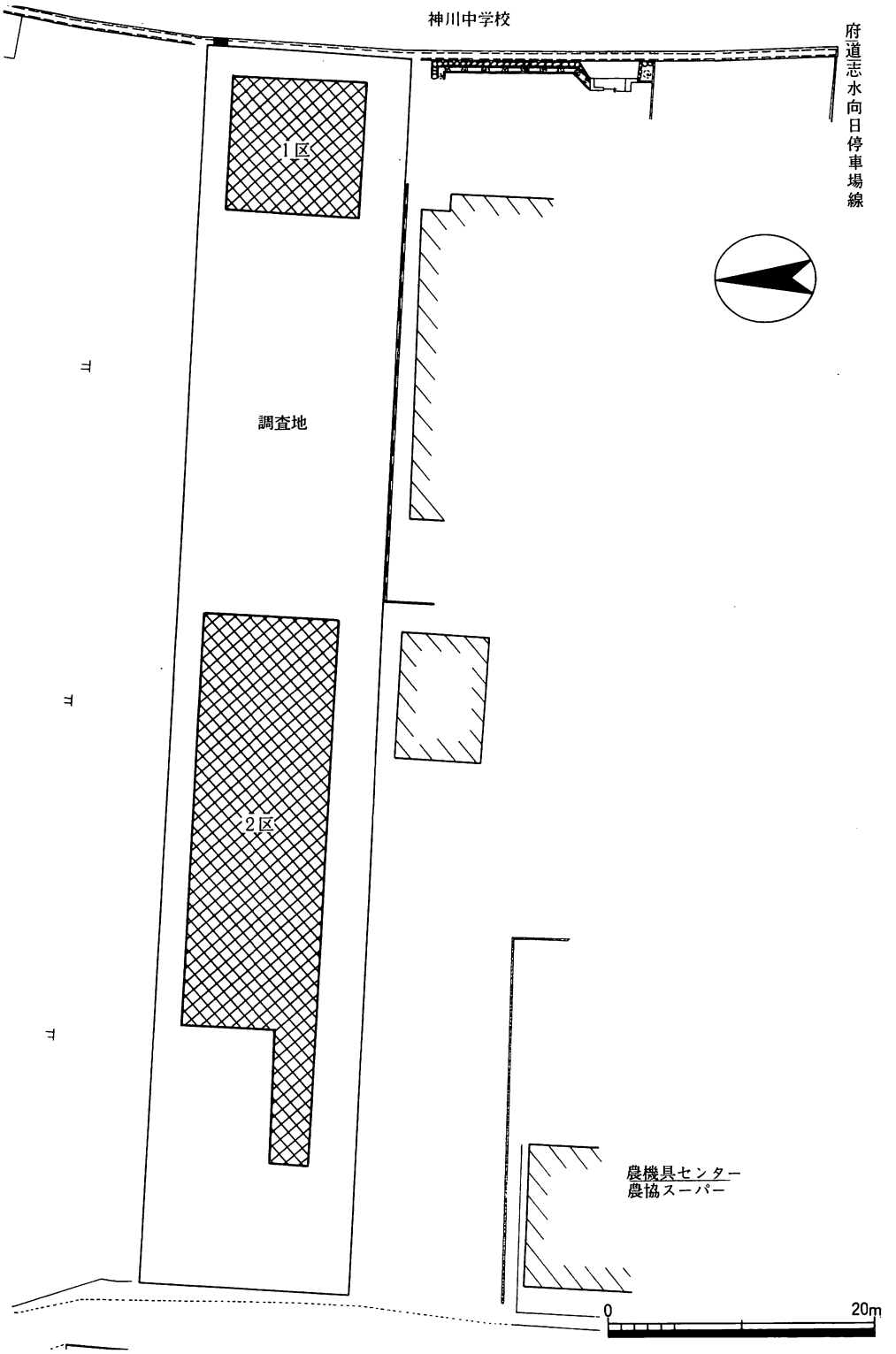


図3　調査地周辺図

埋蔵文化財研究所に調査を委託し、当研究所が、昭和58年２月20日から３月23日にかけて発掘調査を実施した。

2　調査の概要

調査区の設定に際しては、調査地中央南北方向に東三坊大路が、調査地東端に古墳時代溝の検出が想定された(注３)。このため東端に東西10ｍ、南北10ｍ約100㎡の調査区を、中央部に東西32ｍ、南北10ｍ約350㎡の調査区を設定した。調査面積は、調査時の排土搬出が困難であること、調査日数が少ないこと、未調査地区は将来の調査に委ねられること(注４)などから、約450㎡とした。

調査は、土層の堆積状況と遺構面確認の目安を得ることなどを目的に、調査地内数ヶ所に試掘を実施することから開始した。このあと耕作土、その他の表土層を機械力によって排土する作業を行なった。調査区の呼称は、機械掘削終了順に東端の調査区を１区、西側の調査区を２区とした。

調査の結果、当初の予想通り古墳時代と長岡京期の遺構・遺物を検出した。１区では、古墳時代の溝(注５)、長岡京期の柵４列、その他の柱穴がある。２区でも同じく古墳時代の溝４条、長岡京期の溝３条、建物１棟、柵２列、土坑１基などがある。長岡京期の溝３条のうち２条は、東三坊大路東西両側溝と考えられるものである。

出土遺物は、１区、２区の古墳時代溝から前期の一括遺物が出土した。長岡京期の遺物は、量的に少なくまとまりに欠けた。特記すべき遺物としては、１区溝下層から出土した縄文時代の石匕と、２区東三坊大路西側溝から出土した萬年通宝が挙げられよう。

図４　調査風景

第2章　遺　　跡

1　遺跡の層序

地表は水田の耕作土で、調査地全域でほぼ水平面を保つ。海抜高は11.30ｍを測る。１区、２区ともに耕土(第１層)、床土(第２層)と堆積し、それぞれ15cm、20cmの層厚を持つ。第１層は灰色シルト、第２層は灰オリーブ色シルトである。その下の第３層上層は、西側で明オリーブ灰色シルト、東側が浅黄色微砂及び粗砂などで、下層は明青灰色粘土である。西から東へ順に堆積している。２区長岡京期の遺構は、やや不明瞭ながら第３層下層から一部が検出されるが、確実な検出面としては第４層上面である。

第４層は、西側で約30cmの層厚を持つ灰オリーブ色粘土であるが、Ｙ254付近を境に青灰色細砂が現われ、東側での約20cmの厚さを持つ灰色粘土を覆うに至る。上端はほぼ海抜10.30ｍにそろう。古墳時代前期の溝(ＳＤ63)は、その上層に第４層下層である灰色粘土層の流入が見られ、また後期の溝(ＳＤ40)上層に堆積する青灰色細砂は第４層上層に近似する。このことから、第４層は古墳時代前期から後期にかけて堆積したと考えられる。

第５層は緑灰色粘土で、西から東へゆるやかに堆積する極めて安定した土層である。遺物は出土しない。

一方１区では、第４層下に灰オリーブ色微砂が40cmの厚さで堆積し、その下に溝（ＳＤ64）の上層である灰色粘土や、溝の機能停止直前の小細流の堆積などが見られる。ＳＤ64は、灰色粘土、青灰色粘土を主体に堆積し、海抜８ｍ前後で遺物、流木の大量に出土する面が検出される。これはオリーブ色細砂と粘土から成る。以下１ｍの粗砂と細砂の堆積を経て、溝の底面と考えられる淡灰色微砂が海抜7.30ｍで現われる。

１区での長岡京期の遺構は、灰オリーブ色微砂を成立面としている。しかし第３層下層で一部の遺構が検出されるのは２区と同様である。

2　遺構の概要

古墳時代の遺構はには、調査区全域（１区）が遺構の中と考えられる溝(ＳＤ64)、後期の溝（ＳＤ40）とこれに切られた前期の溝（ＳＤ63）がある。その他、層位的には古墳時代以前と考えられる溝３条（ＳＤ65、ＳＤ67、ＳＤ67Ｂ）を検出したが、遺物は出土して

いない。

長岡京期の遺構は、東三坊大路東西両側溝の推定位置に合致する溝２条（ＳＤ27、ＳＤ36）とこれに伴う柵２列(ＳＡ25、ＳＡ37)、建物１棟(ＳＢ33)、土坑１基(ＳＫ28)、４期にわたって建て替えられたと考えられる柵４列(ＳＡ41、ＳＡ45、ＳＡ39、ＳＡ50)がある。その他、溝１条（ＳＤ29）不明柱穴７孔などがある。

3　古墳時代の遺構

ＳＤ64　１区で検出した溝で、調査区全域が堆積層の中である。溝の深さは、底部と考えられる淡灰色泥砂層上面で7.3ｍを測り、長岡京期の遺構面より2.8ｍほど下る。堆積は上層に緑灰色細砂、中層に青灰色シルト及び緑灰色粘土、下層が灰オリーブ細砂と粗砂などである。遺物は土師器壺、甕、高杯、器台、鉢、木製品、植物遺体が中層と下層の境付近から多量に出土した。下層からは少量の弥生土器と縄文時代の石匕１点が出土している。

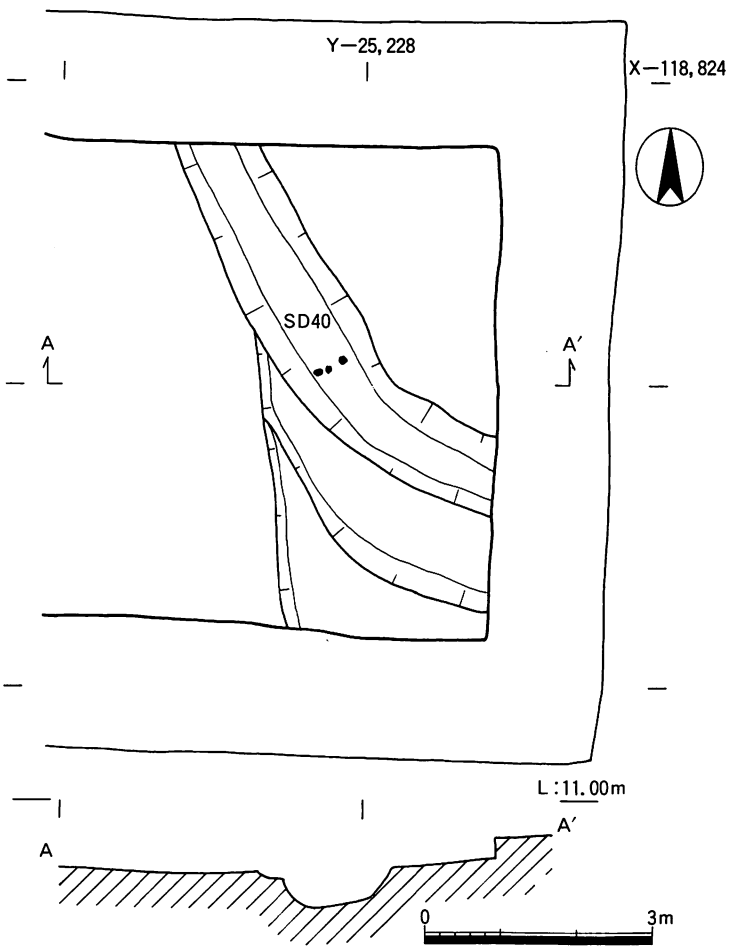


図５　ＳＤ40実測図

ＳＤ40　２区東端を西北から東南方向に流れた溝で、幅は北側で1.8ｍ、南端で2.2ｍを測る。深さは約50cmである。堆積はレンズ状を呈し、上、中層ともに青灰色を呈する粗砂、細砂、微砂層が見られる。下層中央部には厚さ10cmの灰色粘土が半月状に堆積する。その他溝中央底部に３本の杭が検出され、堰に利

用されたものであろうか。

下層溝であるＳＤ63を切ること、長岡京期のＳＤ27、ＳＫ28に切られていることなどから、古墳時代後半に盛期を迎え、長岡京期までには機能を停止したと考えられる。

ＳＤ63　同じく２区東端を南北方向に流れた溝である。東肩は調査区外のため正確な溝幅は明らかではない。しかし南端で東側底部がやや上昇し始めており、これから復元すると、東西幅は約2.5m程度と考えられよう。溝の断面形状は、底部を丸くしたＶ字形を呈する。溝北端に杭が検出されたこと、断面形が整っていることなどから、人工的に掘られた溝の可能性がある。遺物は底部中央に集中し、土師器壺、甕、高杯、器台、鉢などの小片が大量に出土した。時期的には、古墳時代前期の遺物を伴うこと、ＳＤ40に切られることなどから、古墳時代前期を盛期とし、後期には既に機能の大半を停止したことが考えられる。

ＳＤ65　２区拡張区西端に検出された、西北から東南方向へ流れた溝である。幅は90cm、深さは40cmを測る。断面の形状は半円を呈する。南端東肩がやや肩崩れを起し不整である。長岡京期の遺構成立面である第５層を排土した後に検出したため、古墳時代を下ることはない。

ＳＤ67　２区中央部で第５層排土後に検出した。ほぼ南北方向に流れた溝である。幅は2.5ｍ、深さは30cmである。埋土である灰白色シルト層の土層で弥生土器片を検出した。

ＳＤ67Ｂ　２区中央部で検出した。東北から西南の方向へ流れた溝である。断面の形状はゆるやかなＶ字形を呈する。堆積は上層が青灰色粘土、下層が浅黄色シルトである。ＳＤ67を切る。

４．長岡京期の遺構

ＳＫ28　２区西側で検出した東西２ｍ、南北４ｍ以上、深さ10cmを測る不定形の土坑である。ＳＤ27の西肩を覆う。堆積が極めて浅く、出土遺物もＳＤ27と差が認められないことから、ＳＤ27の機能停止直後の窪地へ遺物が溜ったものであろう。

ＳＤ27　２区西端で検出した南北溝で、幅は南端で1.4m、中央部で1.2mを測り、深さ

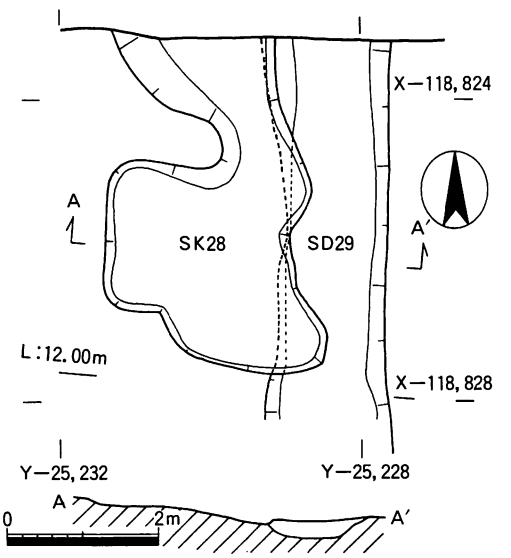


図６　ＳＫ28実測図

は35cmである。堆積はレンズ状を呈し、上層が灰白色細砂、下層が青灰色微砂及びシルトから成る。ＳＢ28、ＳＤ29に切られる。

主な出土遺物は、土師器、須恵器、瓦、木製品、木片などで、時期的には長岡京期のものである。

ＳＤ29　２区西端中央部で検出されて東西溝で、幅50cm、深さ５cmを測る。２区東壁下で北方向に屈曲する。出土遺物は土師器、須恵器などで、長岡京期の土器である。

ＳＤ36　２区西側に検出した南北溝で、溝幅は北側1.1ｍ、南側で１ｍ、深さ20ｍを測る。埋土は青灰色粘土及びシルトでレンズ状の堆積を見せる。

出土遺物は、土師器、須恵器、瓦、銭貨などがある。

ＳＢ33　２区東端、ＳＤ27の東側1.5ｍの位置で桁行３間、梁間１間分を検出した。桁行柱間は2.1ｍ、梁間は2.7ｍを測る。柱穴埋土は青灰色砂及びシルトから成る。

ＳＡ15　同じく２区東端、ＳＤ27東肩から50～70cm東で検出された、南北方向の柵列である。柱間は不統一で、４間分を確認した。北からそれぞれ2.1ｍ、2.75ｍ、1.25ｍ、1.6ｍである。柱穴の埋土は青灰色砂あるいはシルトである。

ＳＡ41　１区中央に検出した西北に伸びる柵列で４間分を検出した。柱穴掘形は円形に近いものが多い。柱間はほぼ2.1ｍを測る。

ＳＡ45　同じく１区中央で検出した南北方向の柵列である。ＳＡ41の東隣に検出し、これに切られる。４間分の検出を見た。柱間は2.1ｍを測る。

ＳＡ39　１区中央部に、ＳＡ50を切って成立する南北方向の柵列である。ＳＡ50とほぼ同一列にある。柱間は2.8～3.3ｍで不統一である。

ＳＡ50　ＳＡ45、ＳＡ39に切られる南北柵列で、四列のうち最古と考えられる。柱穴掘形は隅丸方形を呈する。５間分を検出した。柱間は2.1ｍを測る。

ＳＡ37　２区西端拡張地区で検出して東西方向と考えられる柵で、柱間寸法は４ｍを測る。最西端で検出して柱穴掘形内に礫を持つ。

第3章　遺　　物

1　遺物の概要

本調査で出土した遺物はコンテナ8箱を数える。このうち7箱が土器及び瓦で、他の1箱は木製品、金属製品、石製品などであった。

土器には弥生土器、土師器、須恵器、緑釉陶器、製塩土器がある。木製品には杭、曲物底板、もえさし、用途不明加工木などがある。石製品と金属製品には、石匕、銭貨、釘、その他がある。

出土遺物を時期的に見れば、古墳時代前期と長岡京期に大半が集中する。古墳時代前期の遺物はＳＤ63、ＳＤ64から比較的まとまって出土した。長岡京期では、ＳＫ28から一括遺物が出土した他は、各遺構ともに量が少ない。

以下、古墳時代の遺物では、ＳＤ63、ＳＤ64出土の遺物の説明を行ない、長岡京期では各遺構毎ではなく、器種別に説明を加える。表2は、出土遺物の総量と器種・器形別分布を数量で表示するため作製した。

2　古墳時代以前の遺物

ＳＤ63出土遺物(図7)　ＳＤ63から出土した遺物には、土師器甕、壺、高杯、器台、甑、木製品、植物種子などがある。

土師器甕は、口縁端部をつまみ上げるもの（甕Ａ1）と内側へ肥厚するもの（甕Ａ2）の2種類がある。いずれも体部内面をケズる。壺は平底の底部を持ち、体部下半をハケによって調整するものがある。(注6)壺は外上方に開く口頸部を有し、口縁端部をわずかに内湾させる。口頸部内面は横方向にミガく。底部は丸底であろう。(注7)高杯（12）は、杯部が斜め上方へ直線的に立上り、内外面を放射状にミガく。脚部、裾部にも入念なミガキを施す。脚部内面はケズる。透しは円孔で三方に配する。器台は杯部が出土し、内面を放射状にミガく。色調は淡赤色を呈する。(注8)他に甑と考えられる平底の底部に焼成以前の小円

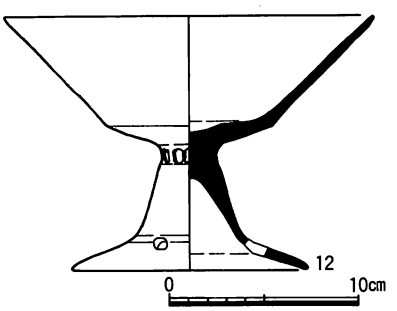


図7　ＳＤ63出土高杯

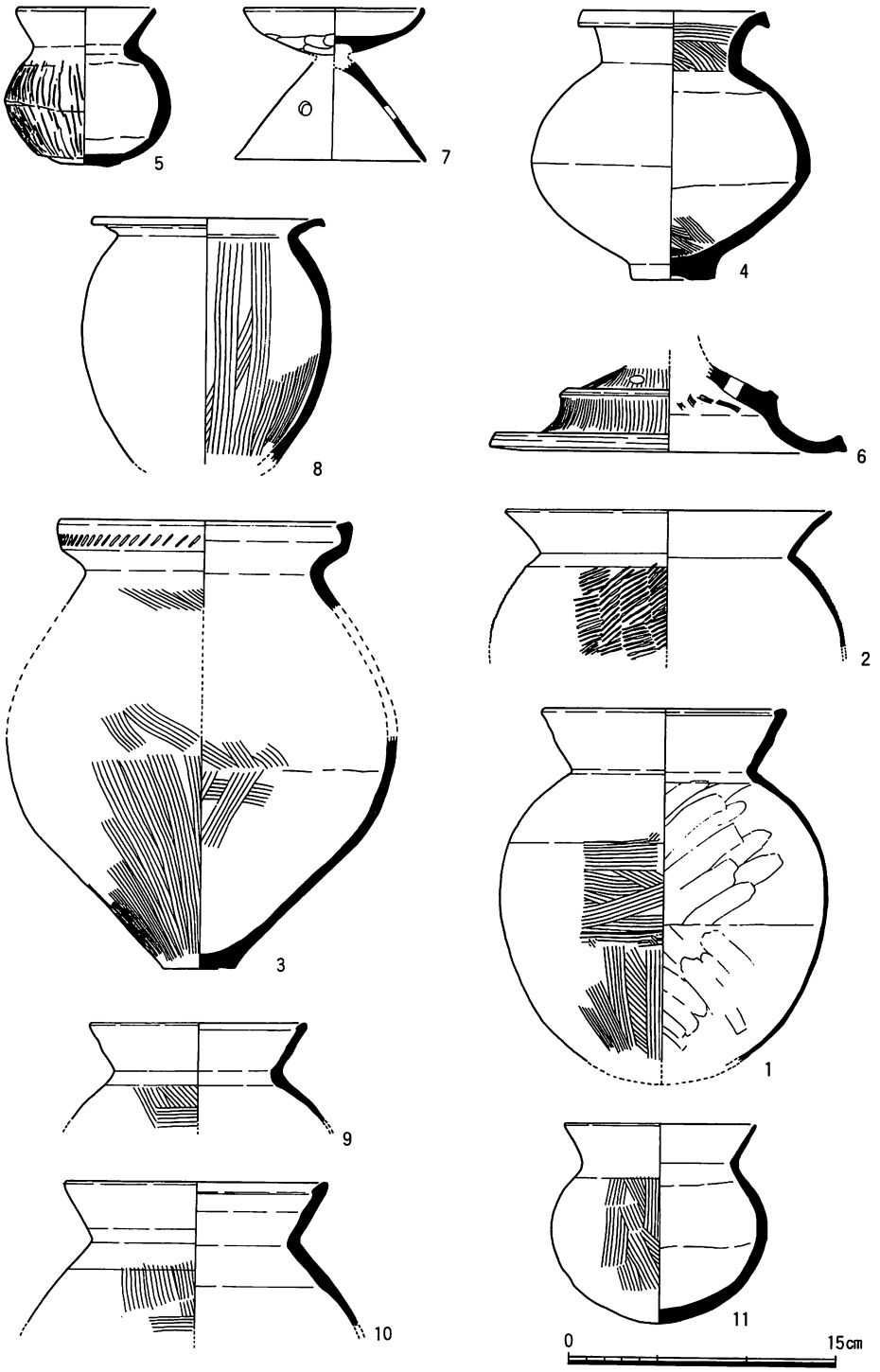


図８　ＳＤ64出土遺物

孔を穿ったものがある。体部下半はハケによる調整を施す。(注9)

木製品は、杭先と考えられるもので、直径5㎝の丸木材に鋭利な面取りを施してある。(注10)

ＳＤ64出土遺物(図８)　ＳＸ64からは土師器甕、壺、高杯、器台、木製品、石製品、自然流木などが出土した。

土師器甕は、丸底で器壁の薄いもの（甕Ａ）平底で受口状の口縁を持ちやや器壁の厚いもの(甕Ｂ)、「く」の文状口縁で肩部の張るもの（甕Ｃ）の３種類が出土している。甕Ａのうち(２)は茶褐色を呈し、口頸部、体部共に器壁は薄い。体部内面をケズリ、外面は頸部下端まで細かいタタキによる整形を施す。口縁はやや外反気味である。(１)は、口頸部の器壁はやや厚く、端部は内側へ肥厚する。体部内面はケズリ、体部外面上部はナデ、中位以下をハケによる調整を行なう。体部の器壁は極めて薄い。色調は黄灰色を呈する。甕Ｂ(３)はやや大型であるが、小型のものもある。(注11)受口状の口縁を持ち、外面に施文を行なう。体部内面をハケによって調整を行なう。平底の底部を持つ。甕Ｃ(８)は「く」の字状の口縁を持ち、端部は外側に肥厚する。焼成は極めて良好で、断面は黒色化する。底部の形態は不明である。

壺はその形状から３種類に分けられる。壺Ａ(５)は、体部がほぼ球形で斜め上方に直線的に伸びる口頸部を持つ小型のもの、壺Ｂ(４)は平底で球形の体部を有し、「く」の字状に外反した口頸部を持ち端部が垂下するもの、壺Ｃは口頸部は外反し、上下に肥厚した口縁端部を持ち、刻文や円形浮文を施すものである。(注12)

高杯も２種類が認められる。高杯Ａ(６)は段のある裾部を持ち、裾部によく似た杯部を持つものである。高杯Ｂは杯部が直線的に斜め上方に伸び筒状の脚部と大きく外側に開く裾部を持ち、脚部と裾部が明瞭に分かれる。(注13)

器台(７)は、内湾気味に立上る杯部と直線的に外下方へ開く脚部を持つ。脚部には透しを三方に配する。

石匕（図９）は入念な調整を行ない形を整えたもので、材質はサヌカイトである。高さ４㎝、幅5.3㎝、厚さ0.8㎝を測る。(注14)

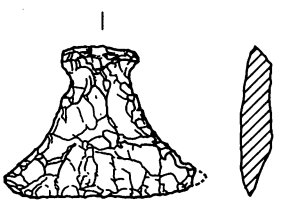


図９　ＳＤ64出土石匕（Ｓ＝1／2）

その他、加工痕のある用途不明の木片と自然流木が出土した。

３　長岡京期の遺物

土師器(図10)　土師器には椀、杯、皿、甕、鉢、蓋、壺、高杯がある。椀は口径13㎝前

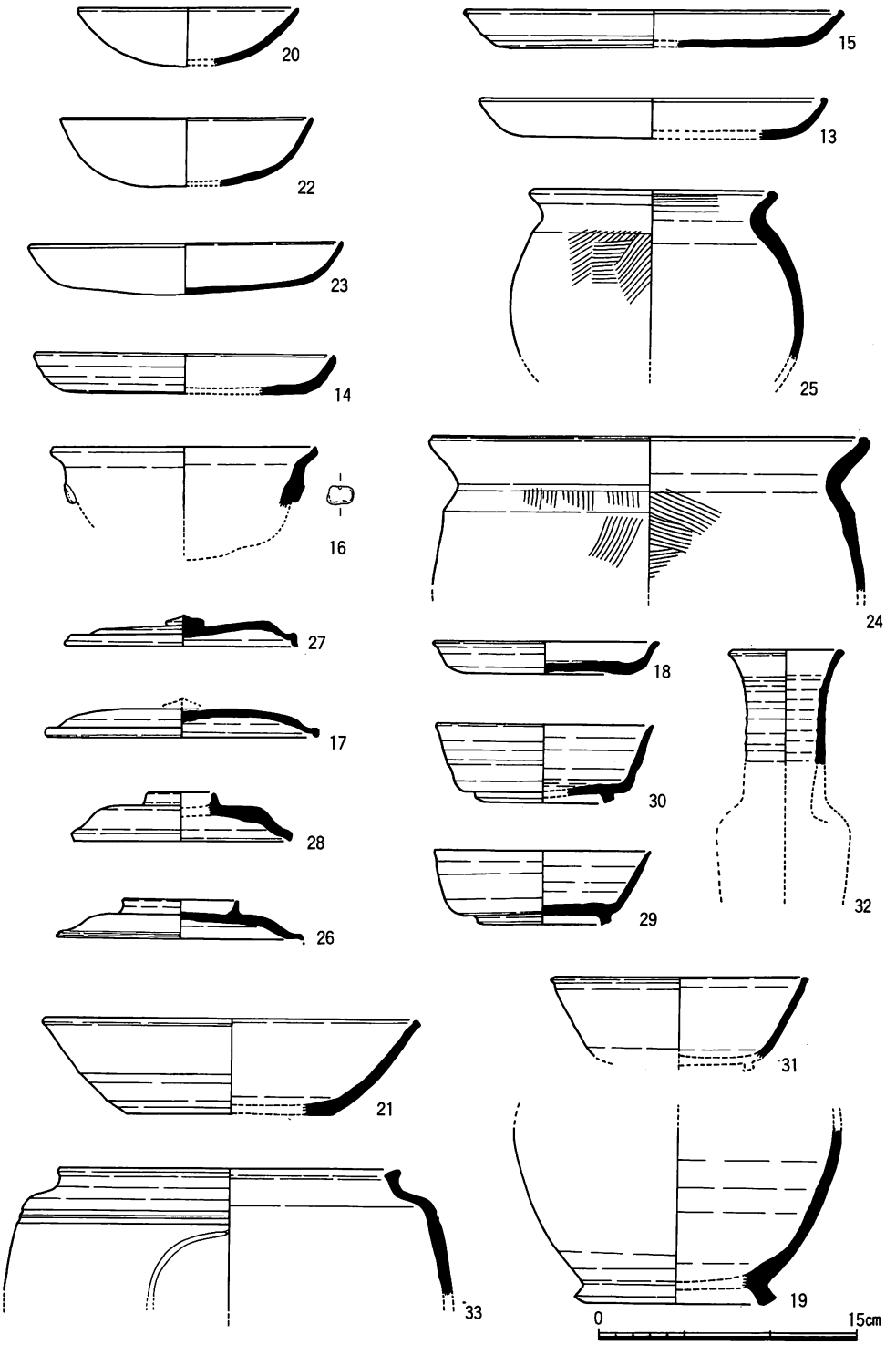


図10　長岡京期の出土遺物

後、器高3.5㎝前後のもの(20)と口径15㎝前後、器高4㎝前後のもの(22)がある。いづれも体部外面をケズる。杯は口径14.2㎝、器高3.2㎝のもので、ナデによる調整を行なったものである。(注15) 皿は調整手法から2種類に分けられる。皿A（13・15・23）は体部・底部の外面をケズるもので、口径20㎝前後のものと15㎝前後のものが認められる。皿B（14）はナデのみで調整を行なうものである。両種の皿ともに体部、底部外面に煤の付着したものが多い。(注16) 甕は口径14.5㎝(25)、18.9㎝、25㎝(24)の3種類が出土している。鉢（16）は器高10㎝前後で、両側方に退化した把手をつける。その他、壺、宝珠形のつまみを持った蓋、脚部に丁寧な面取りを施した高杯があるが、いづれも小破片である。

須恵器(図10)　須恵器には、蓋、皿、杯、鉢、壺、平瓶がある。蓋は、宝珠形つまみのつくもの（17、27）と輪状のつまみを持つもの（26、28）の2種類が認められる。皿(18)は、口径13.3㎝、器高1.3㎝のものが1点出土した。杯は短かい逆台形の高台を持ち、口径12.5㎝前後、器高4.5㎝前後のもの（29、30）と、口径15.4㎝、器高5.5㎝のもの(31)がある。鉢（21）は、口径22㎝、器高5.6㎝を測り、高台を持たない。体部下半と底部をケズる。壺は形態から2種類に分けられる。壺A（32）は口頸部が長く伸び、口縁端部が外反するもので、壺B（19）は断面が四角形で外方へ踏ん張る高台を持ち、腹部が大きく張るタイプのものである。その他、平瓶の体部の小破片が1点出土している。

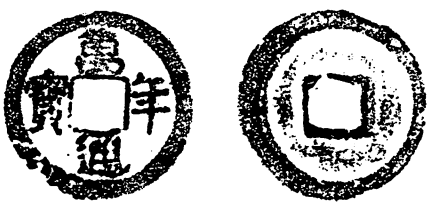


図11　SD36出土銭貨（S＝1／1）

緑釉陶器(図10)　緑釉陶器は火舎（33）の破片が出土した。口径は約20㎝を測り、肩部には2条の凹線を入れる。内面には施釉を行なわない。

その他　金属製品には銭貨、釘などがある。銭貨（図11）は萬年通宝で、表面の宝、通の間に鬆を生じ、裏面は横方向の笵ずれが認められる。径2.5㎝、厚さ2㎜を測る。

表２　出土遺物の総破片数と百分比

遺構 / 器種	全体		ＳＤ－27		ＳＫ－28		ＳＤ－36		ＳＤ－63		ＳＤ－64	
	破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%
弥生土器	38	1.5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師器	2096	84.4	32	58.2	287	88.3	7	24.8	585	99.2	337	99.7
須恵器	198	7.8	5	9.1	25	7.7	7	24.8	0	0	0	0
緑釉陶器	8	0.3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
瓦塼類	75	3.0	11	20.0	11	3.4	1	3.4	0	0	0	0
木製品	40	1.6	5	9.1	2	0.6	13	40.0	1	0.2	0	0
石製品	2	0.1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.3
金属製品	2	0.1	0	0	0	0	1	3.4	0	0	0	0
その他	16	0.6	0	0	0	0	0	0	1	0.2	0	0
不明	9	0.4	2	3.6	0	0	0	0	3	0.5	0	0
計	2484	100	55	100	325	100	29	100	590	100	338	100
器形	破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%
椀杯	230	9.2	18	32.7	60	18.5	2	6.9	1	0.2	0	0
皿	375	15.1	4	7.3	91	18.0	3	10.3	0	0	0	0
蓋	24	1.0	0	0	5	1.5	0	0	0	0	0	0
高杯	77	3.1	0	0	5	1.5	1	3.4	11	1.9	9	2.7
壺	344	13.9	0	0	9	2.8	1	3.4	139	23.6	90	26.6
鉢	26	1.0	1	1.8	0	0	6	20.7	18	3.1	0	0
平瓶	2	0.1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
器台	4	0.2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
製塩土器	99	3.6	3	5.5	0	0	0	0	0	0	0	0
甕	967	38.9	7	12.7	73	22.5	1	3.4	378	64.1	228	67.5
火舎	3	0.1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
羽釜	1	0.1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
竈	2	0.1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
石匕	1	0.1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.3
土馬	1	0.1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
瓦	75	3.0	11	20.0	11	3.4	1	3.4	0	0	0	0
木製品	40	1.6	5	9.1	2	0.6	13	40.0	1	0.2	0	0
銭貨	1	0.1	0	0	0	0	1	3.4	0	0	0	0
その他	19	0.7	1	1.8	0	0	0	0	1	0.2	1	0.3
不明	193	7.4	5	9.1	69	21.2	0	0	41	6.9	9	2.7
計	2484	100	55	100	325	100	29	100	590	100	338	100

第4章　ま　と　め

長岡京期の遺構のうち、ＳＤ27、ＳＤ36は、検出層位、出土遺物、溝の位置、方位などから、東三坊大路の東側溝と西側溝であろう。両側溝の心心での距離は、約25ｍを測る。両側溝を同時に検出した例としては、昭和55年度二条四坊の調査(注17)での二条大路南北両側溝検出が挙げられる。これも両側溝間心心での距離は約25ｍを測る。東三坊大路東側溝に限れば、昭和55年度五条三坊(注18)の調査、Ｄ区ＳＤ02として既に検出されており、本調査ＳＤ27と同一線上に位置している。また、出土している遺物の年代は長岡京の時代に属するものであり、年代的にも長岡京の東三坊大路跡と推定することができる。

２区東側の柵（ＳＡ25）は建物（ＳＢ33）と東側溝（ＳＤ27）を画する機能を持つものであるが、ただ、建物との距離が1.2ｍと近接していることは、建物が東西棟である可能性も考慮すべきであろうか。

１区中央に検出した柵列は、方形のやや大きい掘形を持つＳＡ50が、切り合いから考えて最古であり、西側列の柵列ほど新しくなることが指摘できる。しかし、短期間に４回に及ぶ建て替えを行なったと考えることは不自然で、これをすべて柵とすることには疑問が残る。

これらの長岡京期の遺構の上面を覆う第３層下層は、長岡京期の遺物をかなりの量で含んでおり、長岡京廃絶時期の整地層であろう。遺物に年代幅がないことから、廃絶後まもなく整地を受け、田園化が計られたことが急であったことを推測させる。

古墳時代溝（ＳＤ64）は、昭和55年度五条三坊の調査(注19)の13区ＳＫ06の西北の延長上にあり、同一の溝であろうが、ただ、最下層と考えられる堆積層から弥生土器の出土が極めて微量であることは、前記ＳＫ06との推積の相違が認められる。

その他、特筆すべきは縄文時代の石匕がＳＤ64下層で出土したことであろう。溝（ＳＤ64）の肩口の海抜高は10.50ｍを測る。石匕自体は上流からの流れ推積であることを差し引いても、かなりの低位置からの出土と言える。縄文時代の遺物を低位置から出土した例としては、昭和55年度大籔遺跡の調査(注20)があり、海抜15ｍ前後で、後期後半、宮滝式と考えられる土器片が出土している。今回出土した石匕は、これらと共に、桂川右岸地域における縄文遺跡の立地を再考する貴重な一資料となろう。

表３　出土土器遺構別一覧表　（単位：cm）

土器番号	出土遺構、層位	器種	器形	法量 口径	法量 器高	法量 その他	備考
1	ＳＤ　64下層	土師器	甕	13.5	20.5～21.0	腹径18.5	体部内面はケズる。肩部外面はナデ。腹部以下はハケによる調整。完形。
2	〃	〃	〃	18.2			体部内面はケズる。体部外面はタタキによる調整。色調は茶褐色で雲母を多く含む。
3	〃	〃	〃	16.7		底径 4.1	体部内外面をハケで調整する。平底。
4	〃	〃	壺	10.8	15.0	腹径15.7 底径 4.7	頸部内面はハケで調整。中央が凹む平底を持つ。底部内面をハケ調整。完形。
5	〃	〃	〃	7.9	8.9	腹径 9.3 底径 3.8	体部外面を粗くミガく。底部は平底状になる。完形。
6	〃	〃	高杯			底径20.0	裾部外面をミガく。全体は淡赤色を呈する。透しは三方。
7	〃	〃	器台	10.2		底径10.8	体部内面は細かい剝離痕あり。杯部外面下半はケズる。全体は淡赤色を呈する。
8	ＳＤ　64中層	〃	甕	13.2	15.0～16.0	腹径14.0	体部内面をハケで調整する。焼成は極めて良好。
9	〃	〃	〃	12.3			体部内面をケズる。体部外面はハケ調整。
10	〃	〃	〃	14.5			体部内面をケズる。体部外面はハケ調整。
11	〃	〃	壺	10.8	11.4	腹径12.2	体部外面はハケ調整。底部の器壁厚い。完形。
12	〃	〃	高杯	19.6	13.5	底径12.5	杯部内外面を放射状にミガく。
13	ＳＤ　27	〃	ⅢＡ	20.3	2.3		体部底部外面をケズる。体部、底部外面に煤付着。
14	ＳＫ　28	〃	〃	17.6			体部内外面をナデる。体部内外面に煤付着。
15	〃	〃	〃	22.2	2.3		体部下半と底部外面をケズる。体部、底部に煤付着。
16	〃	〃	鉢	15.5			退化した把手をつける。外面に煤が付着する。
17	〃	須恵器	蓋	16.0	1.8以上		
18	〃	〃	Ⅲ	13.3	1.9		体部外面に煤付着。
19	〃	〃	壺			底径11.8	高台は貼り付け。
20	ＳＤ　29	土師器	椀	12.9	3.4		体部、底部外面をケズる。
21	ＳＤ　36	須恵器	鉢	22.0	5.6		
22	ＳＰ　39	土師器	椀	14.7	4.0		体部、底部外面をケズる。
23	第３層	〃	Ⅲ	18.3	3.0		
24	〃	〃	甕	25.0			肩部内外面をハケによる調整。
25	〃	〃	〃	14.5			体部外面はハケによる調整。口縁部内面は粗い横方向のハケ調整。
26	〃	須恵器	蓋	14.5	2.3		把手は貼り付け。
27	〃	〃	〃	13.5	1.8		
28	〃	〃	〃	12.9	2.8		器壁やや厚い。
29	〃	〃	杯	12.0	4.3	底径 7.7	高台畳付をケズる。
30	〃	〃	〃	12.7	4.5	底径 8.1	高台畳付と外面体部下端をケズる。
31	〃	〃	〃	15.1			
32	〃	須恵器	壺	6.7			
33	〃	緑釉陶器	火舎	19.8			淡黄灰色の釉。

注

（注１）　本書表１を参照

（注２）　「日本専売公社工場用地内埋蔵文化財発掘調査概報」鳥羽離宮跡調査研究所、昭和52年

（注３）　『長岡京跡』「京都市計画道路１等大路第３類第46号外環状線整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書」財団法人京都市埋蔵文化財研究所　昭和55年　に報告されたＣ区ＳＫ06の北西に本調査区が位置する。

（注４）　いわゆる「確認調査」とされ、調査未済の手続きがとられた。

（注５）　前掲（注３）

（注６）　いづれも小破片のため図化せず。

（注７）　前掲（注６）

（注８）　前掲（注６）

（注９）　前掲（注６）

（注10）　前掲（注６）

（注11）　肩部にクシによる平行線文と波状文を持つ。

（注12）　前掲（注６）

（注13）　ＳＤ63出土高杯と同タイプ。

（注14）　高橋美久二他「長岡京跡昭和53年度発掘調査概要」京都府教育委員会・埋蔵文化財発掘調査概報1979」昭和54年　で近似した石匕が出土している。

（注15）　前掲（注６）

（注16）　本調査では、口径20cm前後の皿の底部外面に煤が付着し、内面に有機物の付着する例が極めて多い。

（注17）　本書表１の調査番号15を参照。

（注18）　前掲（注３）

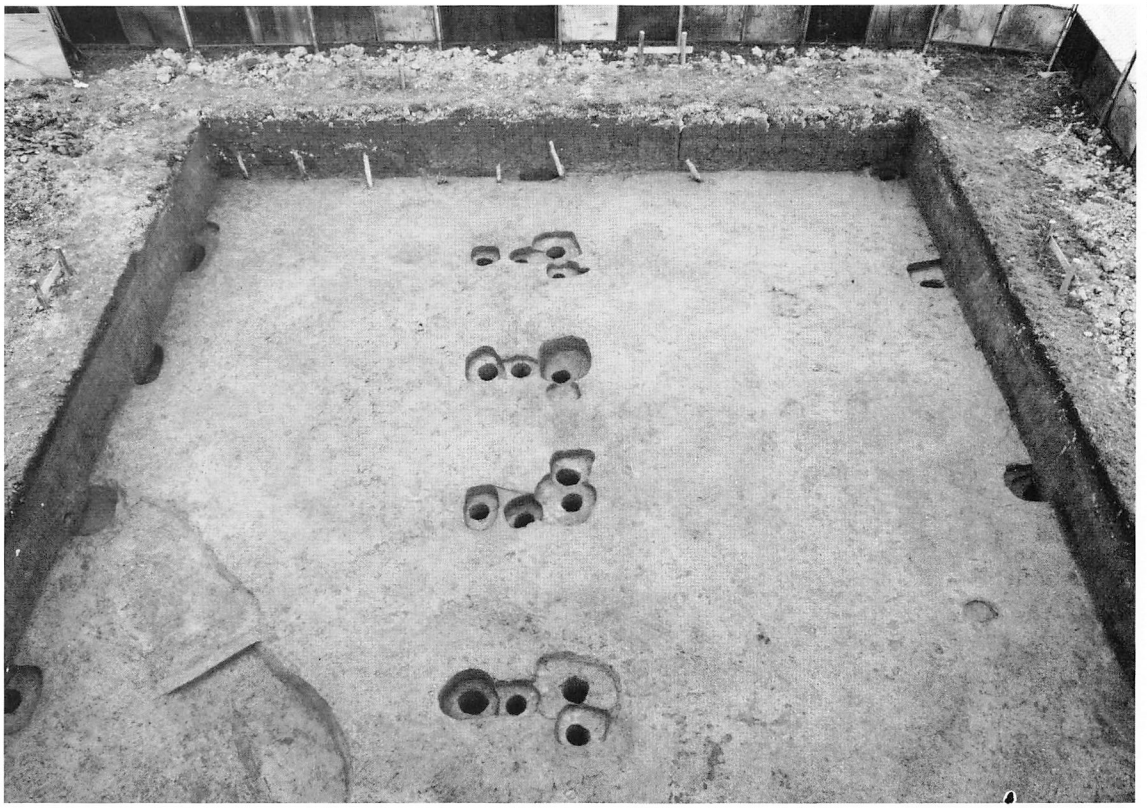
（注19）　前掲（注３）

（注20）　「大籔遺跡発掘調査概要」財団法人京都市埋蔵文化財研究所　昭和55年。

図　　版

1．調査前全景(東から)

2．調査前全景(西南から)



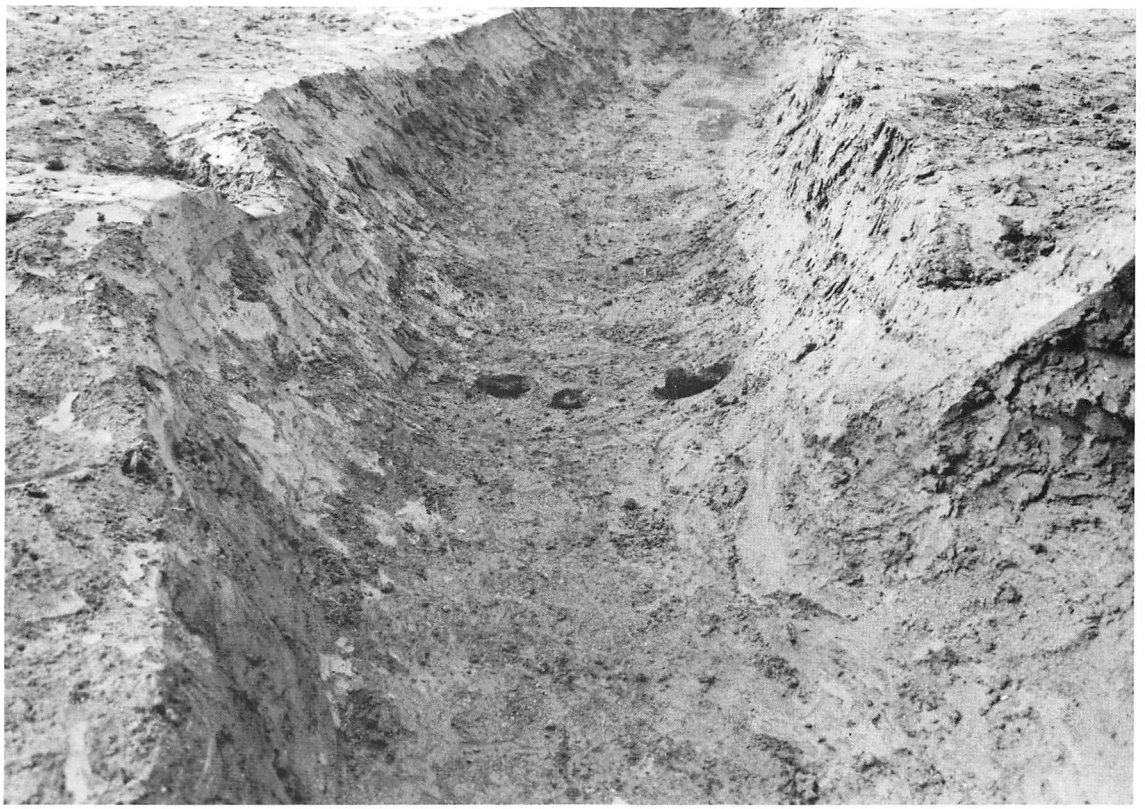
1．1区長岡京期全景(南から)

2．SX64(南から)

2区長岡京期全景(東から)

1．ＳＤ27・ＳＡ25・ＳＢ33(南から)

2．ＳＤ63(南から)



1．ＳＤ40内杭検出状況(南から)

2．ＳＤ67・ＳＤ67Ｂ(北から)

1．ＳＤ27堆積状況(北から)

2．ＳＤ63堆積状況(北から)

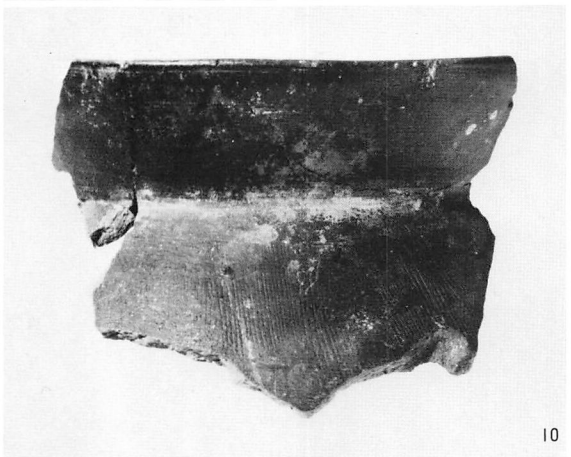
1．ＳＤ36堆積状況(北から)

2．銭貨出土状況(西から)

3．ＳＤ64遺物出土状況(東から)

1

4


10

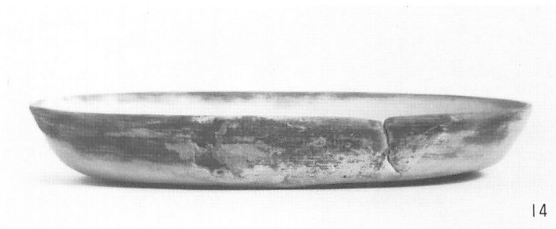
12

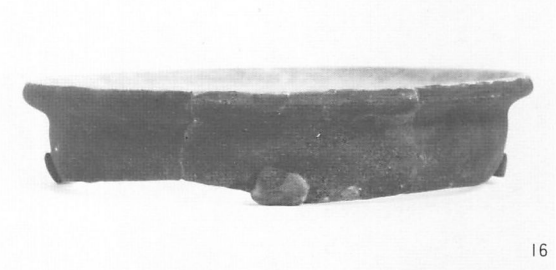
7

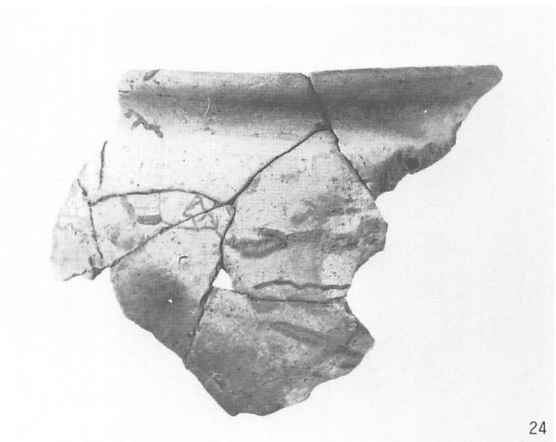
8

古墳時代出土遺物

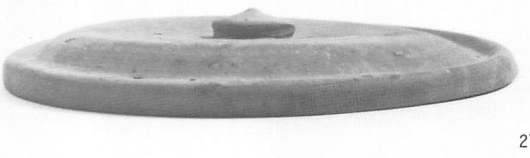
1．古墳時代出土遺物







2．長岡京期出土遺物

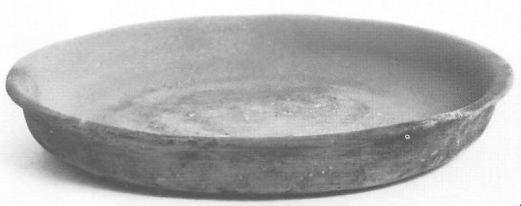


27

17

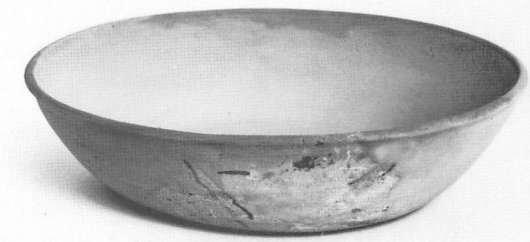
28

26



18

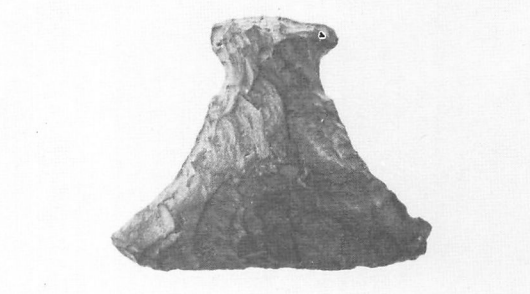
29



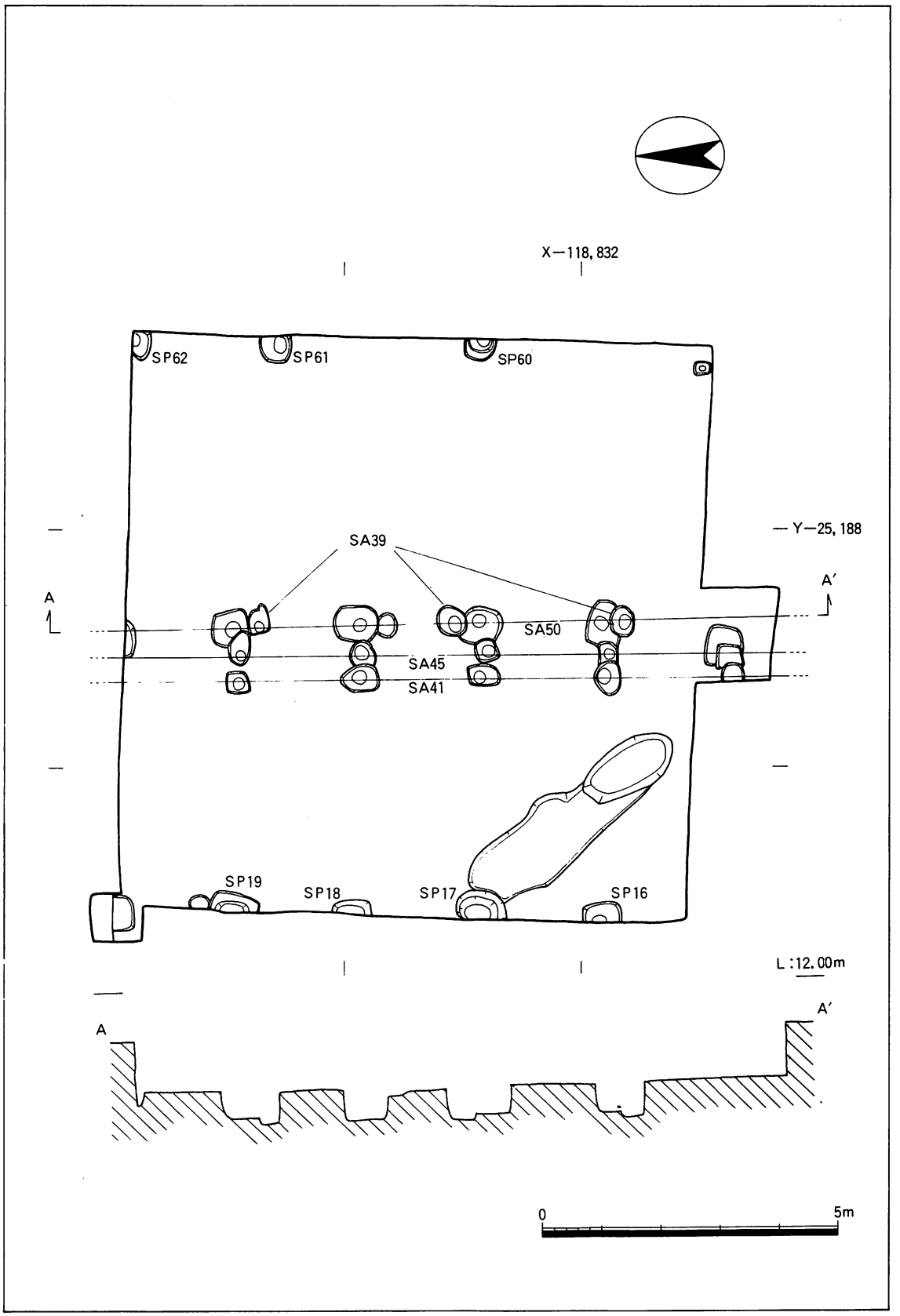
21

30

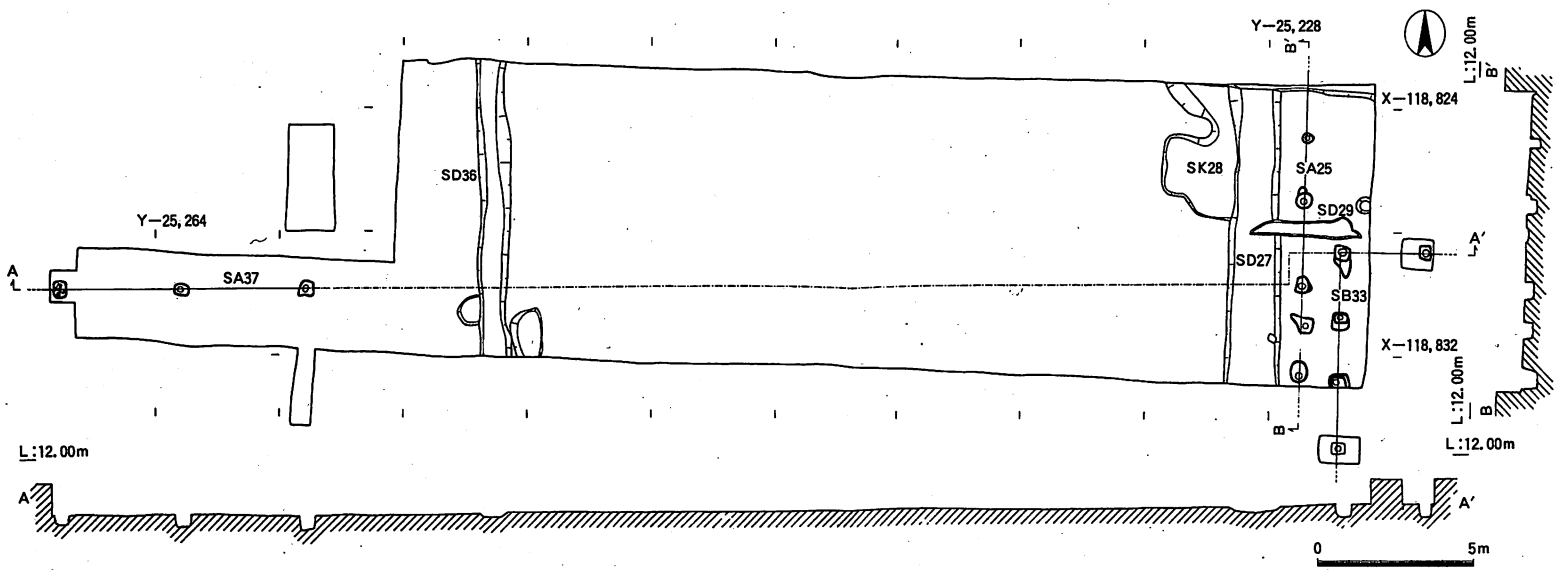
33



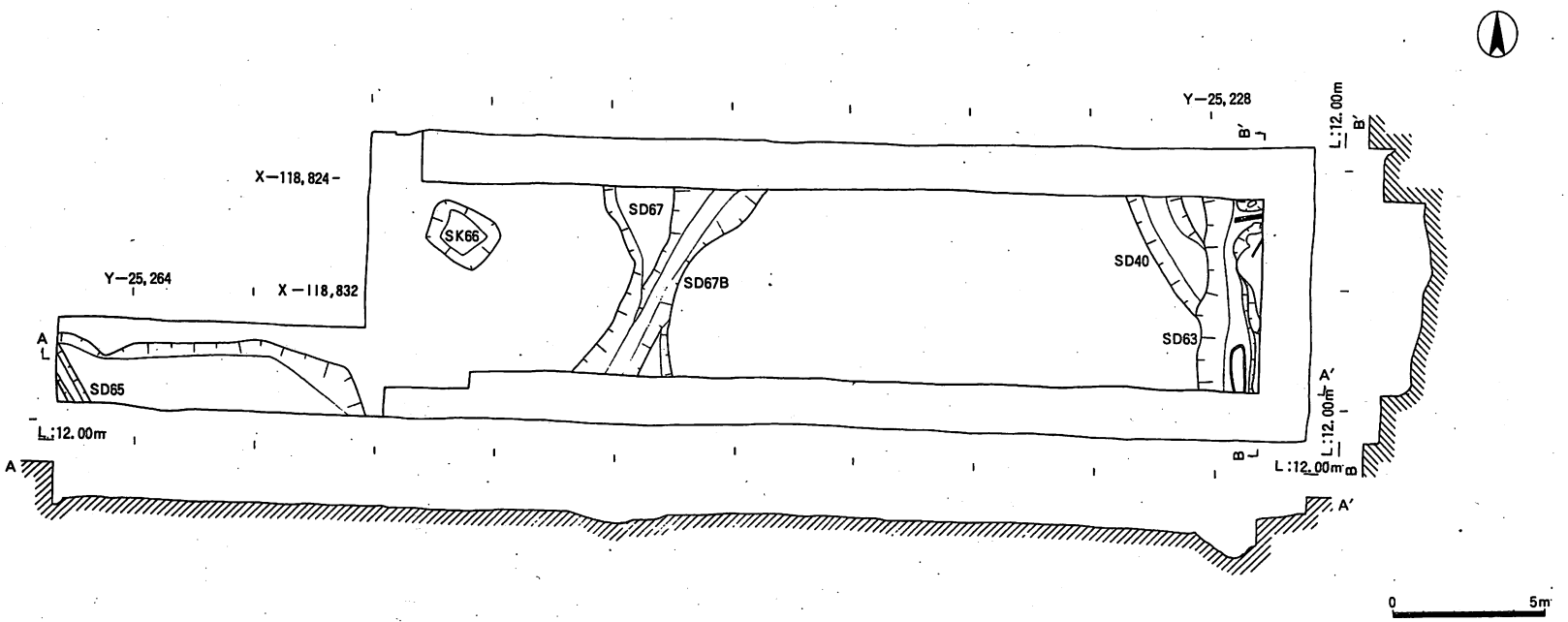
長岡京期及び繩文時代出土遺物


X−118,832
SP62
SP61
SP60
SA39
— Y−25,188
A
A′
SA50
SA45
SA41
SP19
SP18
SP17
SP16
L:12.00m
A
A′
0
5m

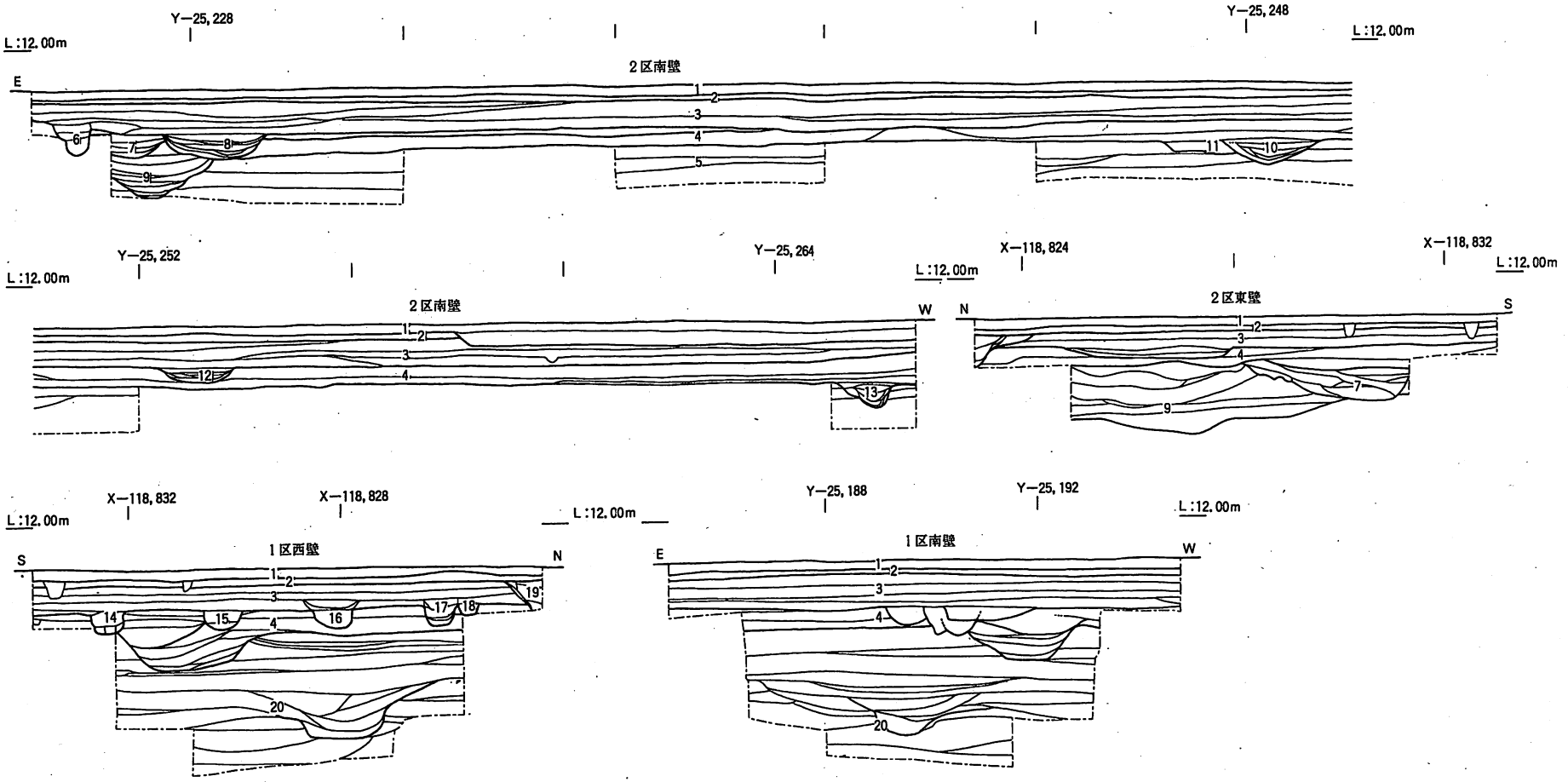
長岡京期1区実測図



1．長岡京期2区実測図



2　古墳時代2区実測図



1	灰色シルト(第1層)	6	SB33	11	SD67	16	SP18
2	灰オリーブ色シルト(第2層)	7	SD40	12	SD36	17	SP19
3	明オリーブ灰色シルト(第3層)	8	SD27	13	SD65	18	SP20
4	灰色シルト(第4層)	9	SD63	14	SP16	19	SD1
5	緑灰色粘土(第5層)	10	SD67B	15	SP17	20	SD64

0 5m

調査区土層堆積図

長岡京跡発掘調査概報

昭和57年度

発行日　昭和58年３月31日

発　行　京都市文化観光局
〒606 京都市左京区岡崎最勝寺町13　京都会館内

編　集　財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
〒602 京都市上京区今出川通大宮東入ル元伊佐町265－1
ＴＥＬ(075)415－０５２１

印　刷　㈲　真　陽　社
〒600 京都市下京区油小路綾小路下ル風早町566
ＴＥＬ(075)351－６０３４